

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 3 日現在

機関番号：34504

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520850

研究課題名(和文) 近世フランスからみた境界域としての英仏海峡—仏英関係史の構築をめざして

研究課題名(英文) the English Channel as a Boundary Zone in Early Modern France

研究代表者

阿河 雄二郎 (AGA, Yujiro)

関西学院大学・文学部・教授

研究者番号：80030188

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、境界域としての英仏海峡に注目しつつ、フランスとイギリスの関係を、海峡を往来するヒト、モノ、情報の動態史として考察した。その結果、第一に、両国は第二次英仏百年戦争という対立状況にあり、また、両国には海峡(さらに海洋)をめぐる認識に大きな違いがあったが、その一方で、領海、漁業専管水域、税関の取締り区域など、海峡の「領有」に関わる交渉が進められ、相互理解や交流をはかる動きを検証できた。第二に、フランス奴隷貿易の構造とその特色を、奴隷船、積荷、資金調達など海事史の面から検討した。奴隷貿易は最終的に収益率の問題に帰着するが、イギリスとの比較を通じて、ヨーロッパ世界経済に与えた意味が確認できた。

研究成果の概要(英文)：In this study, we investigated the role and the significance of the English Channel in early modern France through the movements of people and things and from the view point of "appropriation" of the sea.. First of all, we clarified that several lines were drawn on the English Channel as a result of repeated negotiations about the territorial limit, the exclusive fishing zone and the custom control zone between France and England in this period. We consider that this situation was the origin of the formation of international maritime law.

Secondly, we inspected the characteristics of the French slave trade through the examination of the maritime state of affairs (for example, slave trade ship, funds and cargoes invested in the project) and the "seamen" engaged in the trade. We made sure that the slave trade was not so much profitable as the abolitionist had formerly insisted, but that English trade system was more efficient than that of France from a comparative point of view..

研究分野：西洋史学

キーワード：境界域 英仏海峡 奴隷貿易 関係史 交易ネットワーク 海の領有 奴隷船の構造

1. 研究開始当初の背景

これまで近世ヨーロッパ海洋史の中心的な課題は、大航海時代以降のヨーロッパ人のアジア・アメリカへの進出 (= 植民地獲得のプロセス) と貿易の構造変化、さらに植民地をめぐる列強間のヘゲモニー抗争の解明に置かれてきた。しかし、近年では、港湾、船舶、航海、漁業、海軍、私掠、商人、船員などを焦点に、「海軍史」への関心が高まっている。その背景としては、「陸」の世界とは異なる「海」の世界のイメージ、海の利用のされ方、あるいは、海洋資源の開発・保護といった事柄の面白さや重要性が認識されたことがあるだろう。

近世フランスの海洋史に関しては、ブローデル、F・クルーゼ、メイエールの先駆的な研究のあと、カバントゥヤル・ブエデクが提起する「海洋社会史」の流れを受けて、船員や漁民など「海民」の生活、航海のありさま、植民地(カナダやアンティル諸島)のプランテーション経営、海港都市の港湾施設など多方面の研究がなされるようになった。日本では、深沢克己『海港と文明』(2003年、山川出版社)が注目に値する。研究代表者は、こうした研究動向をふまえ、海洋や沿岸島嶼部のコントロールをめぐる問題を「ロシュフォール海軍工廠の建設」「難破船略奪と漂流物取得権」をテーマに考察してきた。

しかし、このような作業を進めるなかで、研究代表者は、当時の海洋帝国だったフランスが、もっと強大な海洋帝国であったイギリスやオランダとどのような関係にあったかに関心をもつようになった。というのは、一般に列強諸国は世界のヘゲモニーを賭けて激しく争ったとされるが、対立面ばかりではなく、互いに協調・了解・融通しあう面もあったのではないかと感じたからである。航海技術(海図、船舶、積荷など)や、海港都市の発展の仕方も似通っているし、平時において、商人や船員は外国船に乗り組むことに何らためらいがなかった。

加えて、列強間の対立を緩和・解消しようとするさまざまな形での外交交渉、戦時期のヨーロッパを(自由に)頻繁に往来する中立国の人びとや船舶、いわゆるディアスポラの民(ユグノー [= フランス系亡命者]、アイルランド人、ユダヤ人など)の動きを見るにつけ、フランスとヨーロッパ諸国を媒介(ないし調停)する、安定的で双方向的な交流のシステムやネットワークを検討することの必要性を痛感するに至った。それらは、やがて19世紀にヨーロッパ諸国間の平和や協調体制をつくりあげる国際外交、国際法の成立をもたらす基盤となる。

そうした問題意識をもとに、本研究は、フランスとイギリスの関係に絞って考察するが、これまであまり注目されることのなかった境界域 (= 海の国境線) としての「英仏海峡」に着目し、一見して危険で閉鎖的に思われる海峡の有するダイナミズムや、ポジティ

ヴで複合的な役割を解明したい。

2. 研究の目的

本研究の目的は、17 - 18世紀のいわゆる第二次英仏百年戦争の時代、恒常的な戦争という局面状況において、海洋政策や通商・貿易の面でフランスとイギリスがどのような関係を取り結んでいたのか、その実態を両国の境界域にあたる「英仏海峡」の媒介的な役割に注目しつつ検証することである。

その際、本研究では、ふたつの観点から考察を進める。

第一に、政治・外交の面から、英仏海峡の領海 (= 海の国境線) 税関取締り区域、漁業専管区域の画定をめぐる両国の基本的な態度や取り組みの経緯を明らかにする。それは、海の「領有 appropriation」という、より普遍的で今日的な課題を内包している。

第二に、社会・文化の面から、英仏海峡を生活圏とする「海民」の様態、そして、英仏海峡を往来する商人や旅行者の流れを検討する。その結果、戦争という深刻な状況のもとにありながらも、ヒト、モノ、情報の流れが両国間で意外に思われるほどスムーズに展開され、「グランド・ツアー」に代表されるように相互交流が国家によってある程度まで保障・担保されていたことが確認されるだろう。

本研究は、上述した視点から得られた知見をもとに、近世国家 (= 重商主義的な王朝国家) から国民国家へと移行する時期のフランスとイギリスの実際的な関係を明らかにするとともに、研究代表者の念願である「仏英関係史」、あるいは「仏英比較史」の構築につなげるものである。

3. 研究の方法

前述したように、本研究は、カバントゥヤル・ブエデクの問題意識を踏襲し、境界域としての「英仏海峡」に注目しつつ、フランスとイギリスの関係を、海峡を往来するヒト、モノ、情報などの動態史として把握することにあるが、その具体的な方法は以下のとおりである。

第一は、英仏海峡の線引き (= 海の国境線の画定) をめぐるフランスとイギリスの交渉過程とその結果である。もっとも、問題はそれほど簡単ではなかった。なぜなら、この線引きは、国家間の取り決めという以上に、海峡地域で暮らす海民の漁業権や航行権に抵触したからである。そのうえ、17世紀後半まで国際的に承認された海軍法は存在しなかった。この点では、ルイ14世時代に財務総監を務めたコルベールが1681年に制定した海軍王令は画期的な意義をもち、レオーの指摘によれば、逸早く海洋帝国を築いたはずのイギリスでさえ、この王令を尊重する立場をとらざるをえなかった。ここでは、両国による領海等の画定に向けた経緯を検討するとともに、18世紀前半、フランス王権が沿岸島

嶼部に対しておこなった実態調査をも顧慮する。それは、フランス王権がようやく海岸線まで支配下においたことの証である。

第二は、重商主義的な交易戦略を機動させるなかで、フランスとイギリスの政府当局が定めた商品流通の規制、さらに戦時期の出港禁止令などで原則的に途絶したはずの両国間の交易が、どのような手段や回路で緩和され、逆説的には、一定の物流が確保されたかである。これについて、イギリスでは「社会的犯罪」の見地から密輸の研究が盛んになされているが、フランスでも近年取り組まれるようになった。ここでは、モリユの研究を参照しつつ、フランス側のカレーとダンケルク、イギリス側にあつてノルマンディ半島沖に浮かぶジャージー島とガーンジー島に絞って、英仏海峡の兩岸を股にかけた密輸の実態に迫りたい。もちろんこの問題は、貿易商人の国際的な(闇の)ネットワークを培い出し、合わせて、密輸をも生業とする沿岸島嶼部の人びとの生活やマンタリテを浮き彫りにすることになるだろう。

第三は、本研究を開始してすぐさま気づいたことだが、18世紀に全盛を迎えるフランスの奴隷貿易の様態を可能なかぎり詳らかにし、イギリスやオランダなどとの比較を通じて、その特色や役割を把握することである。奴隷貿易については、先発国にあたるイギリスやオランダの実態が早くから紹介されてきたが、最近のフランスでは、海事史の観点を含めて奴隷貿易の実情がほぼ解明されるころまで進んでいる。ここでは、ソジュラやペトレ=グルヌイヨーなどの研究をもとに、ヨーロッパのなかでのフランスの奴隷貿易の位置づけをはかり、当時の国際商業のなかで奴隷貿易が周縁的(エピソード的)でなく、むしろ中心的な役割を担っていたことを明らかにしたい。イギリスのロンドン、プリストル、リヴァプールをはじめ、フランスのナント、ラ・ロシェル、ポルドーは、近世における大西洋沿岸の海港都市の繁栄を代表する海港都市だが、そのいずれもが奴隷貿易に深く関わっていた。国こそ違え、奴隷貿易には共通した土壌や仕組みがあるので、そのありようを比較史の視点から分析する。

4. 研究成果

3年間にわたる本研究の結果、近世フランス海洋史の全体像を論じることができ、なかんずく英仏海峡がもつ役割や意味、奴隷貿易の構造を明らかにできたことは一定の成果と考えている。以下、その要点を箇条書きで記す。

(1)まず、近世フランス海洋史の概要については、『海のイギリス史』(金澤周作編、2013年、昭和堂)のなかの「近世フランスの海軍と社会」で、フランス海軍の成立の事情を軸にその発展が海洋世界に与えた影響を論じた。この論考は、海軍の建設と対外進出が一体不可分な関係にあったことを改めて確

認したうえで、コルベールによって国際貿易港と軍港・海軍工廠がセットでフランス各地に配置されたが、その体制が基本的に20世紀初頭まで継続されたこと、フランスを軍港や砲台で囲い込んだある種の「ミリタリズム」が、沿岸島嶼部の人びとをも巻き込んで「国民化 nationalisation」を促したことを指摘したものである。

(2)「研究の方法」で述べた第一、第二の課題については、主に「近世の英仏海峡」『関西学院史学』40で論じた。その際、とくに強調すべき点は、中世以来の姉妹国であるにもかかわらず、フランスとイギリスは海洋に対する意識や観念が根本的に異なっており、それが近世を通じての海洋政策に投影されたことである。中世から海洋への関心が殊更に高く、対外進出にも積極的なイギリスと比較すると、フランスはそもそも海洋への関心が薄く、ようやく17-18世紀にイギリスに引きずられる形で本格的に海洋政策に乗り出したのである。

そうした状況は、英仏海峡に対する「海洋国家」イギリスと「大陸国家」フランスの対応の違いとなって、明確に現れている。たとえば、中世以来、イギリスは英仏海峡を一筋の川に見立て、「われらの海」として事実上支配下に置いていた。すなわち、両国の境界線はフランス海岸のすぐ沖に想定されていたのである。両国が英仏海峡の真ん中で境界を分け合うようになるのは、フランス革命=ナポレオン戦争期である。また、領海、税関取締り区域、漁業専管水域を画定する作業でも、イギリスはフランスを常に一歩リードしていた。税関取締り区域について、両国は18世紀初めにそれぞれ海岸から2リユ(約10キロメートル)の幅で合意したが、その後逸早くイギリスが沖合4リユ(約20キロメートル)まで取締り範囲を拡大したのに対して、フランスがそれに倣ったのは、革命期の1794年だった。

この時期、打ち続く戦争で敵味方に分かれた両国は、一般に人的・物的交流が少ないと考えられるのだが、現実をみると、フランスを訪れる外国人のなかでイギリス人は突出して多く、平時にはジェントルマンや商人など富裕階級を中心に、フランス(とくにパリ)に滞在するのがイギリスの慣習(=「グランド・ツアー」となっていた。18世紀末には、両国間をつなぐ道路や航路が整備されている。そこには、近代以降の国民国家とは異なるメンタリティが働いている。

密輸については不明な点が多いが、とくに戦時に両国の交易が表立って停止するなかで、非合法な交易である密輸が本領を發揮する余地があった。密輸品は双方向に流れていたが、密輸取り締まりの厳しいイギリス側により必要とされていたようである。密輸のままに現場となった英仏海峡において、沿岸島嶼部の人びとは、境界域にある点を巧みに利用して政府当局に圧力をかけ、警察や税関に

よる取締り体制の名目化・形骸化をはかることに成功した。両国で密輸が減少に転じるのは、関税率が低下する 18 世紀末を待たねばならない。

(3)「研究の方法」の第三の課題である奴隷貿易については、フランスの最新の研究動向を「奴隷船が出港するまで」(森田雅也編『島国文化と異文化遭遇』、2015 年、関西学院大学出版会)にまとめることができた。

奴隷貿易をめぐるのは、近年のフランスで研究が目白押しで、それを総括する試みが待たれるところだった。ここでは、ナント、ラ・ロシェル、ポルドーといった奴隷貿易で繁栄を築いた海港都市のありさまを、研究史をふまえて紹介するとともに、奴隷船がフランスの諸港を出発するまでの準備状況を、奴隷船の船員、奴隷船とその構造、奴隷船の積荷など海事史的な要素を織り込んで記述した。もっとも、研究代表者が重視していたのは、イギリス、オランダなど奴隷貿易の先発国との比較であり、その点は、積荷の内容を扱った箇所でも論じることができた。積荷として調達した綿織物、麻織物、鉄砲、金属類などの物資はフランスでは十分に賄えず、全ヨーロッパからもたらされたのである。いずれにせよ、奴隷貿易は、出資金も大きく、航海の危険も大きい、運がよければ利潤も天井知らずになると想像された点に魅力があったのである。ペトレ=グルヌイヨはこれを「賭博資本主義」と呼んである。

(4)その他、この 3 年間に「幻のリシュリュー城」「バス=ブルターニュ地方の壮大な《困い教会》」「私掠船(コルセール)の唄」「沼地のなかの城塞都市ブルアージュ」といった小論を掲載できたのは、イギリス領のチャネル諸島(ジャージー島やガーンジー島)をはじめ、ウェッサン島、プレスト、ナント、ポルドーなどを訪れ、さらにパリなどの海洋博物館を見学して、近世フランスの海港、船舶などを強くイメージできたからである。その間、パリ第 4 大学のベルセ名誉教授、D・クルーゼ教授にお目にかかり、直接的な指導を受けることもできた。

もちろん、フランスの海洋史研究は緒に付いたばかりで、幅も奥行きも深いので、今後とも研究に邁進してゆきたい。こうした研究を通じて、研究代表者は最終的に「仏英関係史」の構築を目指している。そもそも海洋世界に国境はないのである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 6 件)

阿河雄二郎「沼地のなかの城塞都市ブルアージュ」『関学西洋史論集』38、2015 年、57 - 66 頁、査読無。

阿河雄二郎「私掠船(コルセール)の唄」『シャンソン・フランセズ研究』6、2014

年、61 - 75 頁、査読無。

阿河雄二郎「バス=ブルターニュ地方の壮大な《困い教会》」『関学西洋史論集』37、2014 年、55 - 62 頁、査読無。

阿河雄二郎(翻訳:ミシェル・ナシエ著)「16 - 18 世紀のフランス社会 名誉のある社会」『関西学院史学』41、2014 年、105 - 127 頁、査読無。

阿河雄二郎「近世の英仏海峡 モリューの近業に寄せて」『関西学院史学』40、2013 年、17 - 46 頁、査読無。

阿河雄二郎「幻のリシュリュー城」『関学西洋史論集』36、2013 年、67 - 72 頁、査読無。

〔学会発表〕(計 1 件)

阿河雄二郎「ナポレオン時代の奴隷貿易利潤と情報」(第 64 回日本西洋史学会大会・小シンポジウム「北大西洋海域の船をめぐる文化空間と海民のリテラシー」報告、於立教大学、東京都、2015 年 6 月 1 日)

〔図書〕(計 3 件)

阿河雄二郎「奴隷船が出港するまで 近世フランス奴隷貿易の一面」森田雅也編『島国文化と異文化遭遇』関西学院大学出版会、2015 年、79 - 106 頁。

阿河雄二郎(コレット・ボヌ著)『幻想のジャンヌ・ダルク 中世の想像力と社会』(北原ルミ、嶋中博章、滝澤聡子、頼順子との共訳) 昭和堂、2014 年、400 頁 + 72 頁。

阿河雄二郎「近世フランスの海軍と社会 海洋世界の《国民化》」金澤周作編『海のイギリス史』2013 年、昭和堂、243 - 258 頁。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

阿河 雄二郎 (AGA, Yujiro)
関西学院大学・文学部・教授
研究者番号: 80030188

(2) 研究分担者

()

研究者番号:

(3) 連携研究者

()

研究者番号: